幸福賞

コロナが流行し始めた頃、私は障がい者支援施設で勤務していた。今でこそ5類扱いになったが、当初は未知のウイルスに怯え、物資の買い占めが始まり、閉鎖的な日々を過ごしていた。国からはできるだけ施設を開所し利用者の受入れをしてほしいと通知が届き、感染対策をしながら支援をしていたが、次々と周囲で感染者が報告され、少ない人数での支援に段々と心が疲弊していくのを感じていた。もう限界かもと思っていた頃、利用者さんを自宅に送り、出迎えてくれたご家族とその日の様子をお話ししていた時「こんな情勢の中、もし施設が閉所になっていたら、世の中から疎外されたようで孤独感で耐えられなかったと思う。この子が毎日笑顔で帰ってきてくれるだけで私も心に余裕ができて頑張れるんです。職員さん毎日本当にありがとうね」と言葉を頂いた。コロナ禍になり、笑うことさえも忘れそうだった時に言われた「ありがとう」が疲弊した心にしみた瞬間だった。

感動大賞

「エスコート、ありがとうね。」妻の何気ない一言に、私は勇気をもらいました。

その日は義姉の結婚式の日。妻の親族が一堂に会する日。挙式前の親族紹介で私の紹介もしてもらえることになり、少し緊張も混じる表情で開始の合図を待っていたその時。

視界の端には車いすから立ち上がろうとする妻のおばあちゃんがいました。杖を使えばなんとかまだ歩けるご様子のおばあちゃん。別にどうってことはない、手を添えて、立ち上がってもらって、半歩後ろで席に着くまでお手伝いする。施設に行けばいつも目にする日常風景。特別な感情もなく、何気なくやっていました。

「そうか、エスコートか。」そう思った時、何気ない動作は、特別な心配りに変わりました。

介護の仕事のまた一つ素敵な、誇らしい一面に気づき、勇気をもらった出来事でした。

感動大賞

私は高校の初登校時に送られてきた母からの一通のメールについて書こうと思う。

私は公立高校受験に落ちてしまった。今でも覚えている受験当日の記憶はというと、ただ寒くて、呼吸をする度に寒さと緊張が増して、いく感覚と親からの「お疲れ。」の一言だけだ。

数日後の合否、発表の時のひたすら泣いていたせいで腫れた自分の顔と、親の涙は今でも脳裏に焼き付いている。これらの記憶と共に4月6日、私は高校へ向かった。向かっている途中の電車で一通のメールが届いた。母からだ。すごい長文だった。そこには、「ごめんね」「ありがとう」の文字がいくつか見えた。私はその中で「ずっと味方だから。」の一言に救われた。この8文字が後悔という感情をかき消してくれた。私は独りではないと気づいた時、空気が温かくなった気がした。もう後悔はない、しない。大学受験合否発表時には親と一緒に嬉し涙を流したい。そんなことを思いながら、今日も頑張ろう。

感動賞

小学校卒業直前コロナが流行し始めて卒業式や中学校の入学式は短縮での開催となった中学校に入学してからも東京への校外学習やスキー教室など、様々な行事が中止になり思い出があまり作れませんでした。周りか残念だったね、などの声が多く上がっている中担任の先生はその言葉とは反対のことを言っていました。コロナ禍の学生生活は君たちにしか味わえない。コロナ禍だからこそできた体験もたくさんある。一生忘れられない学生生活だったねという言葉でした。私はこの言葉を聞いたとき驚きました。コロナ禍の状況をポジティブに考えていて、そんな考え方もあるという新しい発見でした。確かに、様々な行事が中止になって思い出作りができなかった3年間。でも、コロナ禍の中で、たくさんの友達を作れて楽しかった。残念だと思うことなんて1つもない。私はこの言葉と出会いどんな状況にても前向きに考えることが大切だということを知ることができました。

感動賞

「ありがとうを言う人からありがとう。言われる人に。」この言葉は、家庭科の先生だった人に言われた言葉だ。

中学1年生の時、私の家庭科の教科を持ってもらった先生だ。先生は、中学2年生に進級するときに、退職してしまった。中学1年生の最後の学年集会の時に言われた言葉だ。

「ありがとうを言う数より、ありがとうを言われる数が多くなる素敵な大人になってください。」担任の先生や、学年主任の先生も、学年が上がるにつれ、何度も説明された。私は改めて言葉の意味を考えたとき、とても素敵な言葉だと思った。

この言葉は、学年主任の先生が手書きで、私たちの学年のクラスに提示してあった。私は卒業しても忘れないと思った。「ありがとう言う人からありがとうと言われる人に。」私たち46期生、学年の先生、この言葉は先生や私たち46期生の心に刻んであるだろう。

私はこの言葉を糧に、頑張っていきたい。

感動賞

「あなたは手を握れますか？」彼が言った言葉が今も耳から離れない。コロナの流行と共に私の生活は一変した。会社の寮に住んでいた私は寮の中に感染者が出れば寮中をくまなく消毒していた。時には役員にアルコール度数が足りないからという理由で一度やった箇所をもう一度やることもあった。そんな生活が続き神経質になっていたのだろう。私は仕事で老人ホームに行く機会があった。そこを利用している彼に握手を求められた際に私は躊躇してしまったのだ。一瞬間が空いたが私はまずいと思い手をだそうとしたがそれを遮るようには冒頭の言葉を言われた。力なく震えていたが真っ直ぐに突き出されていた手を見て私は己を恥じた。後から職員に聞いた所握手をするというのは彼なりのお礼らしい。そうして握手した時にきっと私は彼から何をもらったのだ。そして職を辞め介護福祉士の卵になった今ならきっと彼の手からもらったものを言語化できる。人とふれ合う勇気だ